



嘆きの井戸

—Wailing Well—



## 嘆きの井戸

一九××年のことである。或る有名な学校に所属している義勇団員スカウトの中に、アーサー・ウイルコックスという少年と、スタンレイ・ジャッキンズという少年がいた。二人はおない年で、寄宿舎も同じ、管区も同じ、したがって当然、同じ偵察隊パトロールのメンバーだった。二人はまた、容貌も実によく似ていた。それが、彼等と接触していた教師達にとっては、懸念や面倒や、苦悩の種にさえなりそうだった。だが、まあこの二人性格性質には、なんというえらいちがいがあったことか！

ウイルコックスについては、こんな話があった。彼が教員室へはいって行った時、主任教師はほお笑みながら、見あげるように言った。『いや、ウイルコックス。お前がこの学校にもつとながくいると、賞与基金がなくなりそうだぞ！さあ、この美しい“ケン僧正伝”をお取り。』

これでわしは、お前とお前の御両親へ、心からのお祝いに代えるのだ。』  
—またこんなこともあった。或る日学長が運動場を通りがかった時、ふとウイルコックスに目をつけて、ちよつと立ちどまったが、副学長を顧みて、『あの子は、すばらしい額をもっているね!』。すると副学長は答えて、『まったくです。あれは天才か、でなければ脳水腫を示しているのです。』

義勇<sup>ス</sup>団員<sup>カ</sup>として<sup>ウ</sup>も、ウイルコックスは、いろんな<sup>バッジ</sup>記章やら栄典やらを得ていた。みな競技に勝ち善行を誇るものだった。—炊事<sup>バッジ</sup>、製図<sup>バッジ</sup>、救命<sup>バッジ</sup>、新聞屑を集めたための<sup>バッジ</sup>、教室のドアを常に静かに締めたための<sup>バッジ</sup>等々。このうち、救命<sup>バッジ</sup>については、筆者は、スタンレイ・ジヤツキンスを述べる場合に一言しよう。読者は、ホープ・ジョーンズ氏が、その歌曲集のどれにも、ウイルコックスを推讃するための、特別の詩句を書き加えたと聞いても、驚い

てはならない。また、この下級受持教師が、みごとな赤紫クラレットの小函に入れた善行章を、ウイルコックスに授けた時、感きわまつて涙を流したと聞いても、驚いてはならない。この授与は、第三学級全部が、満場一致、彼に投票したためであつた。

満場一致？いや、筆者はまちがえた。一票だけ反対者があつた。それは小ジャッキンズ（弟）だつた。彼はこの反対には、すぐれた理由があるのだと言つた。彼は大ジャッキンズ（兄）―スタンレーと偶然同級だつたのである。

読者はまた、ウイルコックスが、この数年首席をつづけ、今では学校と給費学生団オピダンスの級長団長を兼任していたといつても驚いてはいけな  
い。で、学課の勉強もあるし、こうした地位の義務も遂行するという過労のため、彼はひどく健康をそこねてしまつた。半年間十分に静養し、外国へ航海などしなくてはいけないと、かかりつけの医師から厳

重に言いわたされたのだった。

ウイルコックスが、今こうした、輝やかなしい向上を遂げてゆく足跡をたどることは、書くも愉快な仕事ではあるが、まあ、彼のことはこれくらいにして、時間がないから、こんどはがらりとちがった事実へ眼を振り向けよう。それはスタンレイ・ジャッキンズ—大ジャッキンズの閲歴である。

スタンレイ・ジャッキンズも、ウイルコックスのように、学校当局の注意をひいていた。だが、それはまったく別のかたちで—だった。例の下級受持教師は、ニコリともしないで言った。『なんだ、またかね？ ジャッキンズ。こうした行状のまままだ意地っばるなら、お前は、いつもこの学校へはいったことを、悔やむようになるだろうよ。ね、よくよく考えて、そんなことにならないのが幸福だと思わなくちゃいかん。』

ジャッキンズには、またこんなこともあった。―たまたま学長が運動場を通りがかった時、クリケットのボールが、ピューツと飛んで彼の踝くわだにあたった。つい彼方むこうから一つの声が叫んだ。『しめた！カット・オヴァー！「クリケットで、ボールにあたるか怪我した場合にいう」。学長はちよつととまって踝をさすりながら、『あの子は、ボールを自分でフェッチ「行って持って帰る」するがいいと思うね！』。するとそばにいた副学長は言った。『そうですね。あれがそばへ来たら、それこそ私が、うんとあれをフェッチ「なぐりつけて」してやりましょう。』』

義勇スカウト団員として、スタンレイ・ジャッキンズが獲得した記章バッジは一つもなかった。ただ、偵察パトロール隊員仲間から、ひったくったり盗んだりしたのならずこし持っていた。炊事競技では、隣る天幕のオランダ炉へ、爆竹花火を差し込もうとして見つげられた。裁縫競技では、二人の少

年をしつかり縫いつけてしまったので、彼等が立ちあがろうとするとちいさな惨事をひきおこした。規律記章に対しては、彼は無資格者だった。というのは、夏の授業時間で、それが特に暑くもあるものなら、彼はインキ罎の中に、指をつっこむのだった。彼の説によれば、涼味をとるためだそうである。彼が、落ちている新聞を拾いあげたとすれば、それは片づけるためでなく、すくなくとも六つのバナナの皮か、蜜柑の皮かを投げ入れるためであつた。お婆さん達が、彼を見かけて近かづいたとすれば、それは、彼女等がせっかく汲んだ水桶を、どうぞ道のまん中へ持って行かないでくれと、涙ながらに頼むためだった。お婆さん達は、それが必定どんな結果になるかを、十分よく知っていたのだつた。

だが、これくらいはまだいい。救命競技に於ける、スタンレイ・ジヤッキンズの行為こそは、もつとも非難に価いし、且つもつとも広範

困にわたる事件をひきおこしたのだった。

この演習は、御承知のごとく、適当な範囲から選ばれた一人の下級生を、きちんと着物を着せたまま、手足をしっかり縛りつけ、義勇スカ団員ウットがその少年を救うべき順番だという時機を見はからって、クツク―堰のもっとも深いところへ投げこむのであった。

スタンレイ・ジャッキンズは、この競技に加わった時、どんな場合でも、いざという大事な瞬間に、はげしい痙攣の発作に襲われ、（彼の悪戯的な仮病だったかも知れない）地びたにころがりまわって、びっくりするほどの叫びを発するのだった。これは当然、水中に投げこまれた生徒に対する注意を、他に転ぜしむることになった。そしてもしそこにアーサー・ウィルコックが居あわさなかつたら、ジャッキンズの七顛八倒は、一層猛烈だったかも知れないのだった。

こういうわけで、下級生受持のジョーンズ先生は、断乎たる処理を

とり、競技の中止を宣告する必要をみとめた。バーズリ・ロビンソンという教師は、五種目の競技中、落伍したのは、ただ四名の下級生だけだと進言したのだが駄目だった。ジョーンズ先生は、ジャッキンズこそ、なんとといっても義勇団スカウトの仕事を妨害したのだと言い、ジャッキンズを除く他の三名は、彼の隊では、これまで優秀なメンバーだったのだと言った。そして先生と校医のレイは、この失敗によってから生じた不都合は、競技から得る利益を帳消しにして余りあるものだと感じた。その上、これ等落伍した生徒の戒告は、その両親達にとって、焦慮ともなり悲歎とさえなった。両親達は、もうジョーンズ先生が発するならわしの、よそゆき文句では満足しなかった。そして実際、彼等の一両人が、イートン校〔英国第一の公立学校。この作者もここの校長だった。〕を訪ね、貴重な時間の多くを、苦情で責め立てた。――

こうして、この救命競技は、今は過去のものとなったのである。

約言して、スタンレイ・ジャッキンズは、義勇団員達には、すっかり信用を失ってしまったのだった。そして彼は団から、退団の通告を受けたという噂が、一両度筆者の耳にはいつている。この成行については、ラムバートという教師がいろいろ彼のために弁護した。そしてついに、もっと穏便な考慮を払われることになった。——ところが、それは、彼に、また一つの“機会”チャンスを与えることになったのである。

そこでわれわれは、スタンレイ・ジャッキンズの姿を、一九××年の夏休暇のはじめ、D州の、美しいW地方で行われた、義勇団キャンプの中で、見かけることになる。

にこやかな朝だった。スタンレイは一二の友達——彼はまだ友達もっていたのだ——と、芝山ダウンのてっぺんで、日向ぼっこしていた。両手をつっかい棒に、頤をのせ、腹んばいになって、彼は遠い彼方をじっと

見つめていたが、

『あすこは、なんてところだろう？』

『どこさ？』友達の一人が言った。

『ずうっと下の、野っ原のまんなかにある、木の茂りみたいなもの……』

『ああ。あれか。あれがなんだか、僕知るもんかい。』

『なんを知りたいって思うの？』もう一人が訊いた。

『なあにね、僕はあの眺めが好きなんだよ。なんてところかな？誰も地図を持ってないんだな？』と、スタンレイは言った。『義勇<sup>ス</sup>団員<sup>カ</sup>を<sup>ウ</sup>呼んで<sup>ッ</sup>らん！』

『地図ならここのいいのがある。』と、ウィルフレッド・ピップスキークが、才走った調子で言った。『あの茂りはちゃんと、この地図にのってらあ。だが、茂りの中に赤い<sup>まる</sup>円がついてるよ。行っちやいけな

いんだらう。』

『赤円あかまるなんかあかまるに驚くもんか。』と、スタンレイは言った。『だが、このへっぽこ地図にや、名が書いてないぜ。』

『ふむ。なんて名なんか、そんなに気になるのだったら、この爺さんに訊くがいいや。』

“この爺さん”とは、ちようどそこへ登って来て、彼等のうしろに佇んでいる、老牧夫のことだった。

『お早うがす。坊っちゃんがた。』と、彼は言った。『そうやって日向ぼっこなさるにやあ、もって来いのええお天気でがすなあ。』

『ええ、ありがとう。』と、アルジャーノン・ド・モントモレンシイは、生来のしとやかさで言った。『お爺さん。あのずっと向うの茂リーあれはなんとという名なんでしょうか？そしてあの中になにがあるのでしょうか？』

『むろん、お話できるだがね。』と牧夫は言った。『ありやあ“嘆きの井戸”ちうんでがすよ。ええ。―だが、あんたがた、うそにでもああたりに、苦しげな叫び声を出しちやなんねえよ。』

『あそこには、井戸があるのですか。』と、アルジャーノンは言った。『誰がそれをつかうのです？』

牧夫は笑った。『とんでもねえ。このあたりで嘆きの井戸をつかうなんて、人間は申すに及ばず、羊に至るまでも、そんなこたあしねえ。わしがここで生れてこのかた、そんな真似をした者あ、だあれもいねでがすよ。』

『ようし。そんなら今日、そのレコードは破られちまうだろう。』と、スタンレイは言った。『というのは、この僕が行くからだ。僕が行って、井戸の水を汲んで、お茶をわかすからだ！』

『なんてえことを！坊っちゃん！』と、牧夫は、飛びあがるような

声で、『そんな事を言っちゃなんねえ。先生さんは、あんたがたに、あのそばへ行っちゃなんねえって、注意なさんなかつたかね？注意しなすった筈だ。』

『注意はなさったよ。』と、ピップスケークが言った。

『黙ってる。馬鹿！』と、スタンレイは言った。『井戸はどうなんだい？水はよくないんかね？なんにしたって煮さえすりゃあ、万事オーライさ。』

『水もだが、ずっとよくねえもんが、あすこにあるらしい。』と牧夫は言った。『まあ、わしの知ってる限りじゃあ、わしの老いぼれ犬だってあすこへ行こうたあしねえだよ。わしにしたって、ほかの誰にしたって、あの事じゃあ、頭んなんか、ちつとぐれえ脳味噌をもちてえもんだ。』

『もつと馬鹿なるなれだ。』と、スタンレイは、すぐぞんざいな、文

法はずれな言葉でいった。そして、『誰かあすこへ行って、なんかひどい目にでも会ったのかね?』

『三人の女と一人の男がね。』と、牧夫は重々しく言った。『まあよくわしの話聞きなさるがええ。わしはこのあたりを知ってるが、あんたがたは知っちゃいなさらねえ。だからわしはくわしい話をするこゝとができるのだよ。今まで十年が間、羊一匹あすこの野で飼われたこゝたあねえし、作物一つあすこで刈り取られたこゝたあねえだ。―しかもあそこはええ土地なんだよ。ここからだって、よく見える筈だ。あすこは生苺と吸枝といろんな草の蔓や殻で、荒れ放題になってることがね。』と、かれはウィルフレッド・ピップスキークのほうを向いて、『坊っちゃん。あんたは望遠鏡で見てなさるが、あんたなら、とにかくわしという通りだといえる筈だ。』

『ああ、その通りだよ。』と、ウィルフレッドはうなずいた。『だが、

足跡が見えるよ。誰かがいつかあすこへは行って行ったにちがいない。』

『足跡!』と、牧夫は言った。『まちげえねえ! 四筋ある筈だ。三人の女と一人の男のだ。』

『そりゃあ、どういうわけだい? 三人の女と一人の男って。』と、スタンレイは、はじめて振り返えって、牧夫を見ながら言った。(彼はこの時まで、背中を向けたまままで話していたのだった—行儀のわるい少年だから)。

『わけ? わけって、わしの言ってるのは、女三人と男一人さ。』  
『それは誰?』と、アルジャーノンが訊いた。『なぜあすこへ行ったの?』

『誰だったか、それを言える人は、今では、四五人くれえのことでしようよ。』と、牧夫は言った。『なんしろ、その人達が身をほろぼし

たつてのは、わしが生れたより前のことだからね。そして、なぜあそこへ行ったかってわけは、今でもまだあの人達の子にだってわからねえんです。わしが聞いたこと以外では、あの人達あゝ生きていた間は悪い人間だったのです。』

『ほおう！なんて変な話だろう！』と、アルジャーノンとウィルフレッドはつぶやいた。だが、スタンレイは、軽蔑しきった、にがにがしい顔をした。

『ふん。君達は、そいつ等が幽霊だったとでも言うのかい？馬鹿な！そんなことを信じるなんて、君達は大馬鹿だよ。そいつ等を見かけたとでも言う人間に、僕は会ってみたいや。』

『わしは、見ただよ。坊っちゃん。』と、牧夫は言った。『あの芝山のそばでね。わしの老ぼれ犬だって口がきけたら、証人になってくれ

るだよ。ちようど今日のような日の四時頃だった。わしは見ただ。―あれ等が、一人々々あの茂りから姿をあらわしてスツと立ちあがり、あの井戸のあるまんなかの樹のほうへ、足跡づたいに、そろりそろりあるいて行くのを見ただよ。』

『どんなふうだったの？話してよ！』と、アルジャーノンとウィルフレッドは、一所懸命に訊いた。

『ぼろ着物と骨さ！四人が四人とも、ヒラヒラするぼろ着物と、白い骨だけさ。あるいて行く時、カラカラという音が聞えるように思えた。ほんとにそろりそろりあるいてな。』

あつちこつちを見まわしてな。』

『どんな顔をしてた？見た？』

『顔なんていっていいもなあ持ってやしなかった。だが、歯は持ってたように見えただよ。』

『えーっ！』と、ウィルフレッドは叫んだ。『そして、樹のほうへ行  
った時、なにをしたの？』

『それは言えねえだよ。』と、牧夫はつづけて、『わしはそこにいら  
れなかったでな。いようとしたって、犬に目がはなされねえだ。あば  
れて逃げてってしまったただからな！こんなこたあ、あいつはそれまで  
しなかった。で、やっとこさあいつに追っつくと、あいつ、まるでわ  
しを忘れちゃったように、わしの喉へ喰いつこうとしただ。なんとか  
なだめてやると、どうやらわしの声を思い出したもんとみえて、子ど  
もがおわびでもするようにな、這い寄って来ただ。わしは二度と、わし  
の犬にあんなになってもれえたくねえだよ。ほかの犬ならともかくも  
な。』

牧夫のそばに来ていて、少年達に親しげにしていた犬は、主人を見  
あげて、いまの話はまったくほんとうですよというふうな表情をした。

少年達は、ちよつと考え込んでいたが、ウィルフレッドは言った。

『で、なぜ、“嘆きの井戸” っていうの？』

『もしあんたがたが、冬の夕方の薄暗い頃、このあたりに立っていたら、そんなことを訊こうとしなさないだろうよ。』と、牧夫は言った。

『なんと言おうが、僕はそんな話は一言も信じないや。』と、スタンレイ・ジャッキンズは言った。『僕は今にあすこへ行ってみせる。もし行かなかつたら笑われていい。』

『じゃあ、あんたはわしの言うことを聞かんといいんだな。』と、牧夫は言った。『あんたは今まで先生が、いけないと戒められた時でも、それをきかなかつただな？ じゃああんたは、むやみな強情つ張りなんだ。わしが大嘘をついたところで、なんになるだかね？ あの原っぱへ行くとあるとすりゃあ、ちいっと足りねえ人間だね。とにかくわしは、

血氣にまかして、なんでも打ち消してしまふ若造は好かねえよ。』

『僕は爺さんのほうが、足りない以上の人間だと思つよ。』と、スタ  
ンレイは遣り返えした。『爺さんはお酒か、そうしたものゝを飲んで  
らしいな。こんなところはみんなに聞かせたくないや。でたらめ話さ。  
さあ、帰ろうよ。みんな。』

そして彼等は立ち去つた。その二人は、『さようなら。』とか『あり  
がとう。』とか牧夫に言ったが、スタンレイは黙つたまま振り返りも  
しなかつた。牧夫は肩をゆすり、つつ立つたままむしろ悲しげに彼等  
を見送つた。

キャンプへの帰り道で、彼等の間には一大論争があつた。が、スタ  
ンレイは、嘆きの井戸へ行きさえすれば、牧夫の話がどんなに馬鹿げ  
たものであるかがはっきりするんだと言ひ張つた。

その夜、引率教師のバーズリ・ロビンソン氏は、いろんな訓示の間に、

どの地図にも赤い円まるの印がついているだろうねと訊いた。そして、『この赤い印の場所へは、足を踏み入れないように、特に注意して置く。』と言った。

五六人ガヤが言いかけたが、そのうちでも、スタンレイは、ムツとむくれた声で言った。『なぜ、いけないんですか？先生。』

『いけないといったらいけないのだ。』と、ロビンソン氏は言った。『この言葉がお前の腑に落ちないにしても、私はそう言わざるを得ないのだ。』そして彼は、教師のラムバート氏へ振り返って、なにか低声こごえで話しあったが、また向き直って、『この事を、みんなによく言って置く。われわれ義勇団員スカウトは、あの原っぱに近かづかないよう警告警告されているのだ。このあたりの多くの人々から、われわれはこの地点だけにキャンプするよう警告警告されているのだ。すくなくともわれわれは、この警告警告に服従しなければならぬ。—みんな、承知だろうね？』

誰も彼も、すなおに『はい。』と言った。が、スタンレイだけは、こうつぶやいた。『そんな奴の言うことに服従するなんて、馬鹿な！』翌日の正午過ぎ間もなくのこと、次のような対話が開かれた。

『ウイルコックス。お前のテントには全員揃っているだろうね？』

『いえ、先生。ジャッキンズがいません。』

『あの子は、一番始末にいけない厄介者だよ。どこへ行ったのだろう？』

『どこだが、見当がつきません。』

『誰かほかに知っている者はないか？』

『先生。嘆きの井戸へ行ったのじゃないかと思えます。』

『誰だ。そう言うのは？。ピップスキーか。嘆きの井戸ってなんだ？』

『先生。あの原っぱのそばにあるんです。——ええ、荒れ地の樹の茂りの中にあるんです。』

『それは、あの赤い円まるの中のことか？大変だ！どうしてお前はそう思うのだ？』

『ジャッキンズは昨日その井戸のことを、むやみに知りたがっていません。牧夫の爺さんがいろんな話をしてくれて、あすこへ行っちゃならないって、僕たちを戒めたんです。だが、ジャッキンズは、それを信じないで、あすこへ行くって言いました。』

『馬鹿な奴だ！』と、教師のホープ・ジョーンズ氏は言った。『なにか持って行ったかい？』

『ええ。綱と缶詰を。僕達は、あすこへ行くなんて、馬鹿だと言っただんですけれど。』

『仕方のない奴！そんな食糧を持ち出して、どんないたずらをしようと言うのか！よし、お前達三人、ついておいで。あいつを探さなくちゃならない。どうしてこんな最も簡単な命令が守れないのだろう？』

その爺さんはどんな話をしたのかね？いや、ぐずぐずしてはいられない。あるきながら聞こう。』

彼等はすぐ出発した。―アルジャーノンとウイルフレッドは、手早やく昨日の話をした。ウイルコックスとジョーンズ氏は、高まる心配とともにそれに耳かたむけた。そのうちに彼等は、昨日牧夫と語り合った、あの芝山の嘴<sup>はな</sup>まで行った。そこからは、例の場所が、十分に俯瞰された。まがった節だらけの樅<sup>もみ</sup>林の中に、井戸が手にとるように見えた。四筋の足跡が、茨やおどろの間に、まがりくねってついていた。へんにぎらぎら暑い日だった。海は金属の床板のように見えた。ソヨリとも風がなかった。彼等は山のとっぺんに達した時、すっかり疲れていた。で、みんな、蒸<sup>む</sup>れた草の上にドタリと身を投げた。

『ジャッキンズの姿は、まだ一つも見受けないね。』と、ジョーンズ氏は言った。『だが、ちよつとここにいよう。お前達は元氣を出して

―黙って、しっぴかり見張るんだよ。』と、ひと息して言葉をつづけた。『なんだか、あの茂りが動いたように思うが。』

『ええ。』と、ウイルコックスはこたえた。『僕もそう思いました。

ごらんなさい……いや、あれはジャッキンズじゃありません。でも、誰かですね。頭をもちあげて……ね？』

『私もそうだったと思うが、たしかではない。』

一瞬、沈黙―それから―

『いや、ジャッキンズだ。たしかに。』と、ウイルコックスが言った。『向う側の茂りを越えようとしている。見えるだろう？ピカピカする物をもつて。あれは君の言った缶詰だよ。』

『ああ、そつだ。ジャッキンズだ。樹のほうへ、まっすぐ進もうとしているんだ。』と、ウイルフレッドが言った。

この時、一所懸命に眼を据えていたアルジャーノンが、突然叫び声

をあげた。

『や！足跡の上になんだか？四つの足跡の上ーおお！あの話の女だ。おお、見たくもない。なんにも起りませんように！』と、こう言いながら、彼は気でも狂ったようにころがりまわって草をひつつかみ、それに頭を埋めようとした。

『そんな事はやめろ！』と、ジョーンズ氏は声高かに言ったが一駄目だった。氏は叫んだ。『さあ、私はあすこへ降りて行かなくちやならん。ウィルフレッド、お前はここにいて、アルジャーノンに気をつけてくれ。ウィルコックス、お前は一所懸命にキャンプへ走って行って、誰かもすこし人を連れておいで。』

ジョーンズ氏とウィルコックスは二人とも駆け出した。ウィルフレッドは、ひとり残ってアルジャーノンを鎮めようとしてベストをつくしたが、とてもよくはならなかった。時々彼は山の下や野のほうへ眼をや

った。―ジョーンズ氏は、大股に飛んで、近かづいて行ったが、おや  
っと驚いたことには、ジョーンズ氏は、ハツと立ちどまって顔をあげ、  
ぐるりを見まわしたかと思うと、急角度に踵を返えたのだった！

どうしたわけなのか？彼はなお原っぱのほうを見つめると、黒いぼ  
ろを着て、白っぽい綴布はぎをそれからみ出させているなにか―恐ろし  
い姿を見たのだった。細長い頸の上に乗った顔は、くたくたによ  
ごれた日よけの婦人帽ボンネットで半ばかくれていた。

そいつは、近かづこうとするジョーンズ氏のほうへ、押し止めるよ  
うに、瘦せた手を振っているのだった。そいつとジョーンズ氏との間  
の空気は、揺れきらめくように思われた。こんなことは今まで見たこ  
ともなかった。そしてウィルフレッドは、眼を見はっているうちに、  
あたまの中に、なにか動転混乱するものを感じはじめ、その力が次第  
に緊迫して来て、誰かに及ぶのではないかと考えるようになった。

彼は急いで、スタンレイ・ジャツキンスへ視線を移した。スタンレイは、茂りのほうへ、やや足早やに進もうとしていた。その動作は義勇団員のおきまり通りだった。たしかに彼は噛みつく木の枝を踏んづけぬように、茨の棘とげにひっかからぬように、注意して歩を運んでいくのだった。彼は、なにも見かけないものの、或る待ち伏せを用心して、音を立てないようにしているのだった。

これらのことを、ウィルフレッドは、ことごとく認めたのだったが、その上に、彼はまた、もっと以上のものを認めて、たちまちハッと胆を冷やした。彼は樹の間に、なにか或るものが待ち構えているのを知った。しかも、もう一つ―それは牧夫が話したような、恐ろしげな黒い姿のもの―が、原っぱの別の方面から、足跡づたいにそろりそろりと、あたりを見まわしながら、動き出した。しかも更に悪いことには、第四のもの―まちがいなく、今度は男だったが、―不幸なスタンレイ

の二三ヤードうしろの茂りから、ヒョロリと姿を現わし、いかにも苦しげな様子で、足跡の間に這い込んで行く―あわれむべきスタンレイは、遂に四方を遮断されたのだった。

ウィルフレッドは、途方に暮れてしまった。すぐアルジャーノンに飛びついて、ゆすぶった。『起きろ。』と、彼は言った。『叫けべー！声かぎり叫ぶんだ。おお、僕たち、呼子笛を持ってらなあ！』

アルジャーノンは、元気をとり戻した。『ここにあるぞ。』と、彼は言った。『ウィルコックスのだ。落して行つたのだ。』

そこで一人は呼子笛を吹き、一人は叫んだ。静かな大気の中に、響きは伝わった。スタンレイは聞きつけた。立ちどまった。ぐるりを振り返った。たちまち彼は叫び声をあげた。山の上から二人の少年が発した声よりも、ずっと鋭いもの、凄いい叫びだった。

だが、もう手おくれだった。スタンレイの背後にうずくまっていた

黒い姿は、彼に飛びかかり、その腰のあたりを、ひつつかんだ。前方に立っていた恐ろしい女の姿は、また両手を振った。得意げに雀踊こおどりしているのだった。樹の間にひそんでいたもう一つの姿は、ジリジリ前進した。彼女もまた自分のほうへ来るなにかを掴もうとするように両手をつき出していた。そして最も遠くはなれていた姿は、うれしげにうなづきながら、急いで近か寄って行った。

ウィルフレッドとアルジャーノンは、恐ろしい沈黙の一瞬間に、万事を了解した。そして男の姿とスタンレイの間に、はげしい掴み合いが行われているのを見た時には、もう息をつくこともできなかつた。スタンレイは、唯一の武器の缶詰でなぐりつけた。それで縁の破れた黒帽が、相手のあたまからころげ落ちた。そして白い頭蓋骨―髪束のかとも思われるしみのついた白い頭蓋骨があらわれた。この時、女の姿の一人が、そばに行ったかと思うと、スタンレイが頸に捲きつけて

いる綱をグイツと引っ張った。その一瞬勝負はついた。苦しげな叫びがバツタリやんだ。そして三人の姿はもみ樅の樹の茂りの輪の中に消えた。

また一瞬間は、救いの手が届きそうにも見えた。ジョーンズ氏は、急いで大股に進もうとした。が、突然立ちどまり、振り返えり、眼をこすったようだった。そして―こんどは原っぱの方へ走り出した。そこでウィルフレッドとアルジャーノンは、うしろへ眼をやった。するとキャンプの一隊が、隣る芝山のとっぺんへ馳せ参じたばかりか、あの牧夫の爺さんが、自分達の山へ駆け登って来るのが見えた。二人の少年は、手招きし、声をあげ、牧夫へ向けて、二三ヤードも駆け寄ろうとしては、あと戻りした。牧夫は歩調を早めた。

もう一度、二人の少年は原っぱを見やった。そこにはなにも眼に入るものがなかった―いや、樹々の間になにかあったか、それとも霧がかかっていたのかな―ジョーンズ氏は茂りをもが蹴くように越え、草むら

を跳りぬけていた。

二人の少年のそばに、牧夫が喘ぎながら、つつ立った。二人の少年は駆け寄ってその両手にかじりついた。『あいつ等が、ジャッキンズをつかまえたんだよ！樹の間へ消えっちまったんだよ！』——これが、やっと繰りかえし口から出せた言葉だった。

『なんだって？あの子が、昨日わしの話したあすこへ、とうとう行っただって言うだかね？可哀そうに！可哀そうに！』

なおなにか続けようとした牧夫の言葉の中へ、ほかの声々が飛び込んだ。キャンプからの救いの人々が到着したのだった。二三、忙しげな応答がすむと、全員はまっしぐらに芝山を駆けおりた。

彼等が原っぱに足を踏み入れようとする、スタンレイ・ジャッキンズの屍体を肩に垂らしたジョーンズ氏に出くわした。ジョーンズ氏は、それが樹にひっかけられて、フラフラ揺れているのを、枝を切っ

ておろしたのだった。屍体には一滴の出血もなかった。

翌日、ジョーンズ氏は、あの林の樹という樹を切り倒し、原っぱの草むらという草むらを焼き払うという趣旨を言明して、斧をひっさげ、敢然として出向いた。ところが、氏は、片脚にひどい切り傷をこしらえ、折れた斧の柄をもって戻って来た。氏は火の粉一つ燃えあがらすこともできず、樹一本取り除くこともできなかつたのだった。

筆者は、嘆きの井戸の現在人口は、ホエューレッシュン三人の女と、一人の男と、そして一人の少年からできあがっていることを聞いている。

アルジャーノンとウィルフレッドが受けた衝撃は、シヨックずいぶんひどかった。両人とも即刻キャンプを去った。そしてこの怪事は、言うまでもなく、当時の人々―死んだ大ジャッキンズを除いて―には、暗黒裡に葬られてしまった。この死者の魂乃至精神を再生すべき第一人者は小ジャッキンズだった。

これが、スタンレイ・ジャッキンズの身の上話であり、またアーサー・ウイルコックスの身の上話である。筆者は今までこの事が、どこでも語られたことはなかったと信ずる。もしこの話が道念モラルをもっているとすれば、その道念モラルがなにかは、明白であると思う。もしもっていないとするなら、どんなふうにもこの話を修正すべきか、筆者にはよくわからない。